

中野徹三「北大のイールズ闘争」論に 反論する

梁田 政方

はじめに

『大原社会問題研究所雑誌』No.651は、そのなかで『1950年前後の学生運動』—北大・東大・早大—を特集している。この時期の学生運動を私も体験しているし、私自身「北大のイールズ闘争」では、当時の北海道学連の責任者として退学処分を受けている。

そんなこともあって強い関心をもって読ませていただいた。ところが中野徹三氏の論文（以下「中野論文」）を読んで、その内容が余りにも事実と違い、私個人の言葉の意味を歪めて引用している部分もあり、そのままに見逃すことは出来ないと考えた。

中野氏は、私と学生時代の一時期を共にしており、2010年5月16日に北大で開かれた「イールズ闘争60周年・安保闘争50周年の年に北大の自由・自治の歴史を考える」と謳った集会では、彼の司会のもとで、私はイールズ闘争について、「当事者の立場からの報告」を行う機会を持った間柄でもある。

ところが中野論文は、この日私が述べた発言のごく一部を引用し、それを利用して「北大イールズ闘争」の真実を大きく歪めるために使っている。

このような論文に接して、私の発言の真意を伝え、名誉を回復するためにも、また何よりも「北大のイールズ闘争」の真実のために反論せざるを得なくなった。幸い「大原社会問題研究所雑誌」編集委員会のご理解で、その機会を持つことを許していただいた。

そんな事情で、私は中野論文のうち事実と反する中心部分について反論し、この機会に「北大イールズ闘争」をめぐる事実とその歴史的意義を考えてみたいと思う。

北大イールズ闘争の重要な特徴——その闘いの真実

1950年前後の学生運動にとって、イールズ闘争自体のもつ意義は、あらためて強調するまでもないと思う。新潟大学から始まったイールズの行脚は全国27大学に及び、約3,000人の教職員と約2万人の学生を相手に「共産主義者教授は大学を去れ」の反共講演を行った。

当然当時の学生運動は、それぞれのところでこの反共講演に強い抵抗を示したが、なかでもイールズをして講演を中止せざるを得ないところまで追い詰めたのは東北大と北大であった。その東北

大と北大の闘争には、若干の違いがあった。

それは東北大の闘いが「大学と学生との意見の十分な検討がないまま講演会を迎えた」（東北大イールズ闘争50周年記念論集『占領下大学の自由を守った青春』の安孫子麟氏報告）のに対して、北大のイールズ闘争は、後述するような幾つかの問題点を含みながら、曲がりなりにも北大全学をあげての闘いに発展させることが出来たことである。その結果闘いは基本的に勝利し、イールズをして「その使命は大学のレッドバージにあったわけだが、彼ほど醜体^(ママ)をさらして帰国した学者もいまだかつてなかったであろう」（札幌市教育委員会編「札幌事件簿」）と言われるような状態となり、彼が最大の狙いとしていた北大の民主的教員の追放も実現できなかった。

しかし、アメリカの全面占領下という条件のもとで、闘争直後から占領軍とその圧力に屈服した日本政府の北大への脅しと圧迫が強まり、これに呼応して政府の意向に迎合する一部学内勢力の暗躍も生まれ、北大全学の結末が乱れ始めた。

当時の力関係のもとでは、闘いの勝利を持ちこたえ真実を貫き通すことができなかった。それがこの闘いの全経過の実態である。

北大当局は、事実調査を中途半端に終わらせ、私を含む10人の学生の処分を行い、それによって、政府に言い逃れの口実を与えることでアメリカ占領軍とイールズの「面目」を立て、事態を收拾せざるを得なかった。それは例えば、被処分者の筆頭にあげられた私自身に対して、ただの一度の事実調査も行わず、ひと言の弁明の機会も与えなかったことを見ても明瞭である。その反面、処分後一定期間を経た後には、被退学処分者には無条件で復学の機会を認め、また退学以外の「処分」も、事実上の撤回（むろん「名誉回復」されたとはいえないし、処分を受けたまま鬼籍に入られた方もおられるが）を行った。

私の勝手な推測かも知れないが、それらは全学的に闘いながら最終的には学生だけに責任をかぶせて事態を收拾せざるを得なかった、当時の北大当局者のなんらかの思いが反映していたのではなからうか。この点は、復学を認めなかったといわれる東北大の場合とは明らかに違っている。

しかし問題なのは、学生を処分することで事態を糊塗しようとしたこの時の北大当局の対応の弱点が、占領支配が終わった後もそのままに維持され、是正されてこなかったことである。そのため被処分者の名誉が完全に回復されなかっただけでなく、「北大イールズ闘争」そのものの真実が正しく伝えられず、事実関係についても多くの謎を残したままになってきている。その最大の問題点は、北大当局が責任をもって編集したはずの『北大125年』誌の記述が次のようになっていることである。（註一これは1950年5月15・16日の事実をめぐる記述である）

「一日目は教官のみの出席により行われ、トラブルもなく終了した。一日目を静かな討論会としたのは、すでに東北大学で講演を学生が妨害して逮捕されていたからである。ところが翌16日は学生にも公開され、講演途中で学生が質問を求めて壇上に上がり、講演は中止となった」

これは全く事実に基づかない記述である。事実是一日目も二日目も全面公開とルールに基づいた自由な討論をすることになっており、現に一日目の討論では、胸のすくような反論でイールズをやり込めた、いわゆる「うなぎ問答」（註一明神氏論文や拙著『北大のイールズ闘争』に全文掲載）が生まれ、学長自らが、イールズを面前にして、「貴方の見解と私の意見は違う」という趣旨の発

言を行い、司会の松浦教授は「今日のイールズ氏の回答はシドロモドロでした。これは多分長旅のお疲れのせいでしょう。ゆっくりお休みになって、不明なところは明日また討議しましょう」と皮肉たっぷりにしめくくった。

勿論この場面は、多くの学生・教職員に公開された場での出来事であり、現に私もその一部始終を傍聴している。「教官のみの出席」という記述の誤りは明白である。つまりイールズらは「満座の中で笑い者にされ、完全に権威を失墜させられた」（明神勲北海道教育大学名誉教授）のである。また、二日目についても、この日始めて「学生にも公開され」たかのような記述や「講演途中で学生が壇上に上がり、講演を中止させた」などの記述は、全くの誤りである。

「北大イールズ事件」をリアルに示すものとして報道され、現に『写真集 北大百年』や『目で見える札幌の100年』など多くの本に掲載されている当日の演壇上の写真を見ても、私の隣にイールズが講演資料を片付けており、トラブルなどの痕跡は全くない。

講演終了後に、静かに演壇に上がり、集会を「全学大会」に切り替えようとしたのが真相である。

当時のアメリカ占領支配のもとで、もし学生が講演途中で壇上に上がり、講師の意志に反して講演を中止させたのであれば、それは「占領政策違反」として、厳しい処断の対象になったであろう。しかしそうはならず、私は逮捕も取調べもされなかった。

占領時代わが国の言論報道には自由が全くなく、イールズ来道をめぐる報道については、占領軍によって大きな圧力がかけられていたことは間違いない。ましてそのイールズが、満座のなかで恥をかいたというような記事を報道する自由は、どこにも存在しなかった。そうした事情も加わって「北大イールズ闘争」の真実が覆い隠され、正しく伝えられなかったのが実態であろう。

今これを糾し、真実を後世に伝えることは、当時を体験した者の残された役割であろうと私は考える。その立場から私は、前記60周年記念集会で「北大イールズ闘争」の真実を正しく伝えることの重要性を強調した。

そして本来ならば、「北大の民主的伝統を生かした誇るべき闘いが、逆に一部の学生が騒いで、イールズの講演を中止させた不祥『事件』になっている」ことを指摘し、当時の学生の行動が、このような報道と全く無縁なものであることを「歴史の証言者」として明らかにした。私はこれが多分最後の機会になるであろうと思い、北大副学長とも会い、是非その誤まった「公史」を書き換えるべきことを提言した。副学長が「事実の違いという指摘は重く受け止める」と述べてくれたのは、私にとってのなによりの救いであった。

そのことは「真実を追求する」大学として当然の責務であるとともに、今改悪が企図されている憲法第23条にも明記されている「学問の自由」と、それを担保する大学の自治を守り抜くためにどうしても必要なことである。

ところが今度の中野論文は、こうした私の主張を真っ向から踏みにじるものとなっている。それは「北大のイールズ闘争」を直接体験した私にとっては、どうしても認めることの出来ない歴史的事実の否定といわなければならない。では具体的に中野論文の誤りを指摘し反論することにしよう。

第一の誤り

第一の誤りは、イールズ闘争が全学的に関われ、講演・懇談会が「全面公開」された経過について、間違った理解をしていることである。

中野論文は、イールズを迎えての方針・戦術について、次のように述べている。

「松浦氏（註一当時の理学部長で学長代理）は、5月6日、イールズを迎えるにあたって独自の発想——『彼の講演の内容がいかにインチキであるかを世に訴えることこそが闘いの正道』であり、『大学らしい理性的なたたかいであるという』——を持ち、それで彼の講演を頭から拒否するのではなく、むしろ学生と教職員の出来るだけ多数に聴かせ、すぐれた質問戦で天下に暴露する、という戦略を立て、全学学生協議会ははじめ北大細胞を含む学生諸団体の代表約20名に提起したが、それは学生団体の要望の大部分を満たすものであったため、代表たちも全面的協力を約した。松浦構想に基づく大学＝学生の『紳士協定』によりイールズ講演会と懇談会が基本的に準備され進められた」

ここで述べられている事実認識は正確でないし、実際とも大きく違っている。

松浦教授は、当時自分がイールズ闘争の先頭に立つことについて、非常に慎重な態度をとっておられた。それは学長代理として当然であるだけでなく、その頃国際学会に責任ある立場で参加されることになっており、占領軍との間で出来る限り摩擦を避けたいと考えておられたようだ。後に明神教授の研究によって明らかになった、当時の占領軍と日本政府とのやりとりの中で、松浦教授の渡航をめぐる否定的な論議が交わされていた事実があるが、それを見てもこの松浦教授の懸念は当然のことであった。

そもそも「松浦構想」なるものは、客観的には存在していなかったし、当時そのような形で語られた事実は全くない。学生・教職員は、共通の要求・意見に基づいて、イールズへの「質問戦術」を考え出し、それと松浦学長代理の考えとがたまたま一致して、講演会・懇談会の「全面公開」が、そのための必要条件であるということになったのである。学生・教職員側は、そのことを大学当局との「紳士協定」と呼んでいた。

しかし、この「紳士協定」は、伊藤学長が出張から帰った段階で、いったん白紙に戻された。それが5月13日のことである。こうして全学実行委員会が発足し、「北大イールズ闘争」推進の役割を担うことになった。

ではなぜ、北大では、このような全学的といえる結束が生まれたのであろうか？それは松浦氏も含めて誰か個人のカヤ考えによって生み出されたものではない。

私は、拙著『北大のイールズ闘争』のなかでも、この点について検討を行ったが、結局のところ、当時の北大の実態があまりにも深刻な状況に置かれていたこと、そのため学生・教職員を問わず、切実な要求を抱えており「北大の復興」と「大学の自治」や「学問の自由」を守ることが、日常的に追求しなければならない直接的な課題になっていたことが挙げられる。

当時の北大は「事実において校舎の狭隘腐朽、設備の不十分、教育研究費の不足、生活費の不足、住宅の欠乏、学費の枯渇、数え来れば実に問題が山積しているものであり、したがって教育の復興、大学の危機が叫ばれるのも無理からぬこと」（伊藤学長の新制大学第一回入学訓辞、1949年7月

28日)という状態にあり、冬の暖房用石炭の確保のために学生が炭鉱に出かけなければならない事態さえ生まれていた。そうしたもとの学生・教職員の間には、「学園復興」について、一定の連帯感が生まれていたといえる。また大学法案への闘いなどを通じてアメリカの占領政策に対する反発も高まり、平和・民主主義への希求も、学生、教職員の間にも強く広がっていた。そこにはクラーク以来培われてきた北大の民主的伝統も息づいていたように感じられる。

「北大を守る会」「学園復興会議」などがつくられ、活動も活発化していた。イールズ闘争の約十ヶ月前、北大に来学した高瀬文相への対応にも、こうした全学的な結集が見られ、文相来学の際に開かれた全学学生会主催の「北大を守る会」には、学生、教職員約500人が参加している。当時の北大新聞(1949年7月12日号)が「注目すべきことは、この中には研究室より滅多に外にでたことのない教授までが多く参加してきた」と報道したような状態が生まれていた。

それらの体験がイールズを迎えての全学的な結末となり、要求・質問によってイールズの姿勢を糾そうという戦術が生まれ、講演会・懇談会の「全面公開」という共通の要求となったのである。その際松浦学長代理の果たした役割は、確かに大きなものがあった。しかしそうだからと言って「松浦構想」なるものが中心となって、イールズへの対応の全てが決められたというのは間違いである。このように主張する中野論文は、当時の北大の実態から著しく離れたものといわなければならない。

第二の誤り

第二の誤りは、『質問戦術』から『講演中止戦術』に目的を変更したなど、ありもしない「事実」をつくり出していることである。

中野論文は、北大新聞5月30日号が松浦氏の言葉として「……教官からの質問書は来ていたけれども、学生側の質問書は来ていなかった。学生側からは平和問題とか大きな要項だけは来ていたが、誰が発言するのか、責任は誰なのか、まったく責任が(マ マ)カイタイするものとしか見え、具体的な内容と提出者の名前をいれることを要求したが、遂に学生はその後来なかった」と書いていることを根拠にして、次のように主張する。

「この証言は、13日が重要な「転機」だったことを物語っている。実行委員会結成以前は、松浦構想に基づいて全面公開のもとの質問戦の追求が基本だったが、13日には評議員会にかけずにイールズ側のプランを受け入れた学長の責任追及が第一の問題とされ、学長の責任の取り方如何と、懇談会の全面公開要求(それは進んで自由討論の要求という非現実的なスローガンに結びついていった)の実現如何によって、イールズ集会への反対ないし協力拒否の可能性が提示され、大学側との対決を一挙に高めた」

これは中野論文による勝手な憶測にしか過ぎない。中野論文は、その主張の根拠を補強するために、さらに次のように言う。

「梁田政方君はイールズ闘争60周年を記念しての一昨年の北大集会でも、司会者席に向かう時の自分の心境について、こう報告した。『今日はじめて言うのですが……もし講演が中止にならず、イールズが松浦さんの言うことを聞かないで、強引に講演を続けていたらどうしょ

う。その時はやむをえない。演壇に上がって実力行使する以外にない、と思っていました』ここで彼ははじめて、この時の行動の真の目的が質問要求でなく、イールズ講演の——したがってまたこの懇談会の中止であつたことを正直に語っている」

ここで引用されている私の発言は事実であるが、意味はまったく違う。このような憶測は、私にとっては甚だ迷惑である。私の話の前後を無視してこの部分だけを切り取った中野論文の憶測は、発言者の名誉を著しく傷つけるものといわなければならない。

同世代でイールズ闘争をとともに闘った仲間たちが中心の集まりだったから、気を許しての話ではあったが、このような根拠のない筋違いの憶測をされるとは、私にとっては全く考えても見なかったことであり心外である。

私の「報告」の全てを読めば明瞭であるが、この発言の前に「事ここに至っては、あくまでも質問を要求し続ける以外に道はない」というのが、「(実行委員が退場して相談した) 時の結論でした」と述べ、実行委員会の方針が「質問要求」を継続するものであったことをはっきりと述べている。また「私は司会席に向かう時、松浦教授が懇談会の中止を一方的に宣言すると予想していませんでした。また仮に司会者が中止を宣言しても、イールズがそのまま従うかどうか分かりませんでした。もしイールズがあくまで講演を続けて、私たちの要求を拒否した場合どうするかということについては、何も決めていませんでした」とも述べている。一体これらの発言のどこに「自分たちの行動の真の目的が質問要求ではなく、イールズ講演——したがってまた懇談会の中止にあったこと」の「正直」な告白があると言うのであろうか？

しかもこの時の私の発言の中心課題は、「北大のイールズ闘争」が「(報道されているような) 一部の学生が騒いで、イールズの講演を中止させた不祥『事件』とは、全く無縁なもの」だと指摘し、それを改めさせることにあった。そしてそのことを闘争の当事者・「歴史の証言者」として「明確にしておきたい」と強調していたのである。

それを充分知る立場にありながら、私が「講演中止」を目的として行動したかのようにいう中野論文の記述を、私はどのように受け止めればよいのであろうか。

当時私は、松浦司会者の席に向かいながら、重大な決意をしなければならなかった。行動の目的はあくまでも約束どおりの「質問」を要求することであったが、そのままに受け入れられず、結果的に講演「妨害」としてデッチあげられる危険が存在することは当然予想された。もしそういう事態になったらどうするのか、それを深刻に考えたのは当然のことであろう。

全学が決め、イールズとの了解のもとで、学長や司会者が決めたルールを一方的に廃棄し、質問を封じてきたのはイールズである。それに屈服し、そのまま見逃すのかどうか、この時には問われていた。たとえ自分がどうなろうとここで引くわけには行かない。「いま大学の自治と学問の自由が現実の問題として、自分の行動にかかっているのだ」という気負いを青年らしい純粋さで、私は胸にしていた。60周年記念集会にあたって私はその時の気持ちを率直に語り伝えたかったのである。それが発言の真意である。

率直に言おう。中野論文は、その時の私たち学生の素朴で純粋な気持ちから随分と遠く、「北大イールズ闘争」の真実を故意に歪めるものになっているのではないかと。

第三の誤り

第三の誤りは、事実無根の共産党幹部の直接介入などを持ち出し、イールズの約束違反の反民主主義的行為を免罪し、結果的には学生への不当処分を容認する立場に陥っていることである。

中野論文は、後に白鳥事件という日本共産党への大弾圧事件を引き起こす引金となった「追平手記」（註一元北大生で当時共産党道党幹部だった追平雍嘉氏の手記、彼は警察・検察の取調べに屈服し党を離れた。その最初の「手記」は検事とともに仕上げたといわれている）の中の「証言」を引用して、イールズ闘争が当時の共産党北海道委員会議長の吉田四郎氏や追平氏など、一部幹部の直接介入によって、引き起こされたかのように説明している。闘争の当事者だった私にとっては、まったく馬鹿げた「つくり話」だが、その一部を引用してみよう。

—……「それで彼（追平）は主な細胞員（註一当時共産党の支部をこのように呼んでいた）を場外に呼んで、司会者を通じてイールズが自分の約束を実行するように頼んでもらうことにしたこと、『その時非党員の学生委員（実行委員のこと—中野）も集まって来たので、全員が壇上に上がって松浦さんと交渉する者、下に残っていざという時に備える者に分けて、再び会場に入った』こと、そして委員が立ち上がると会場の学生は歓声と拍手でこれに応え、「何を勘違いしたのか松浦さんはイールズの話の打ち切らせて……結果的に学生の要求を潰してしまった」と記している……—

これが中野論文による「追平手記」の引用であるが、中野論文は、この「追平手記」の内容を詳しく吟味することもなしに肯定的に受け止め、さらにこれに続けてつぎのようにも述べている。

「実行委員の退場と再入場の間は、これまでイールズ闘争中の堅く秘められた謎の時間だった。それにしても共産党北海道委員会の最高幹部がここまで介入していたとは、私にとっても始めて知る衝撃の証言であった」

当時の実情を知る者にとってこの中野論文は、全く理解に苦しむものといえる。

もともと実行委員の退場・再入場の間のことで秘密事項などは、当時もいまも何一つない。何しろ僅か10分間の間の出来事である。実行委員による簡単な意思統一しかできなかったのが実態である。

実はイールズ闘争終了後、大学当局が実情調査委員会を設けて調査を行った時、イールズの「指示」で持たれたこの懇談会場外の会合に、外部の人間がその場にいたのではないかという疑問が出された。つまり調査委員会側は、学外の共産党員が直接指導介入したという事実をつくりあげようと画策したのである。それに対して、非党員も含めた学生、教職員によってつくられた実行委員会には、「当時実行委員以外の者は部屋におらなかったことをここで明らかにする」（“告”（註）の反駁のために—全学大会実行委員会報告書—）と事実を明確にした。

また学生を処分するために当時の北大当局が作成した「イ事件調査報告書全文」もその中で「学外の共産党員が関係している」とは書いたものの、それを明確に証明できず、「これは学外の人であるからここでは触れない」と述べるに止まってしまったのである。

中野論文は、このどちらの立場に立っているのだろうか？ 論文の内容からすれば、実行委員会の正式な報告書を信用せず、新たな事実を創りあげて、学生を処分するために持ち出した当時の

大学当局を応援しようとしていると思わざるを得ない。もともとたった10分間しかない間に、追平氏が言うように、非会員を含めた実行委員を壇上にあがるかどうかを分別したり、松浦教授にイールズとの約束を守らせるように頼んだりするなど、その場の全てを仕切るようなことが学外の人間に出来る筈がないことは、少し考えてみれば明白である。そんな「手記」を詳しく検討もせずに引用し、それを根拠にあたかも共産党幹部が闘争に直接介入したかのように述べている中野論文の誤りは重大である。

「10分間の間に質問書を英訳して提出せよ」と難癖をつけ、事実上約束を破って質問を拒否したイールズの挑発に対して、学生側実行委員は「事ここに至っては、あくまでも方針通り質問を要求し、誰が民主主義の守り手なのか明確にしよう」と意思統一した。そこには外部の人間が介入する余裕などあろうはずもなく、私にとってこの瞬間は、例えば自分の人生をかけてでも、道学連責任者に恥じない行動をとり、北大の自治と自由のために力を尽くそうと決意した瞬間でもあった。

中野論文は、こうした緊張の一瞬について、それをまともに受け止めて論じるのではなく、事実無根な共産党幹部の行動などを持ち出して、闘いの真実を曇らせる役割を果たしている。この論文の中には、約束を破って一方的講演に終始した、イールズの反民主主義行為に対しては、まともな批判を行う姿勢を全く見ることが出来ない。

それはこの論文が学生の立場に立って真実を追求しようとするのではなく、反共的立場から全てのものを論じようとする偏見に陥っているからだと思う。

もしそうだとするならば、この論文は、イールズ自身が狙ったレッド・パージを容認し、今日の段階でそれを合法化しようとするだけでなく、当時の大学当局と同じく「北大イールズ闘争」を学外勢力に扇動された一部学生の「講演中止」を目的とした妨害行動に仕立てようとするものである。それは学生の処分新たな根拠を与え、「北大イールズ闘争」そのものの歴史的真相を真っ向から汚そうとする新たな策動と言わなければならないであろう。

（やなだ・まさかた 元・北海道学連委員長）